

## 牧師室から (2020.10, 11)

電話から聞こえる彼女の声が弱々しい。「先生、連絡もなくすみませんでした。この頃体の調子が悪くて礼拝に行けませんでした。明日病院に行ってみます」「どこの病院ですか？誰と行くの？」「一人でいきます。」「では、私も行くから」遠慮する彼女を押して私は会う約束をもらった。

大学付属病院の混雑したロービの椅子に彼女は体を丸くして座っていた。手続きを終え、検査、診察、その結果は厳しいもので即入院となった。そして、再検査、何日か後の医者との面談に鈴木牧師と私が立ち合った。

医者は重い口で、肝臓はほぼ機能しない状態で、あっちこっちに転移があり、手術はできない、緩和治療になることを告げた。「私はどのくらい生きられますか？」「どのくらい生きられると思いますか？」「二週間…」「そのようになると思います」

病室に戻った彼女は「大丈夫ですので、ありのまま正直に話してください、と医者に言いましたが、やはり聞くとしんどいですね」と言った。

何にも言えず、私は暗くなる窓からの空を眺めながらただ横に座っていた。そして長い沈黙を破って、押さえたものを吐き出すかのように、怒りが込められた口調で彼女に言ってしまった。「なぜこのようになるまで分からなかったのよ」「忙しくて、また、あまり痛くなかったので…」。お嬢さんたちが来たので、お祈りをしてから私は帰宅した。

15年前に彼女のご主人は天国へ行った。二人共関西の名門大学を卒業して、主人は大企業に就職し、彼女は地域の子どもたちのための活動に積極的であった。素敵なマイホームで聡明な娘たちの成長を楽しむ生活があったのことであった。その時に、信仰と教会生活に支えられたと彼女は何度も言ったことがある。そして、今は末娘が望んだ大学に合格し、ホッとしていたところであった。

ほぼ毎日私は彼女の病室に行った。「ご主人とはどこで出会ったの？」「3人の子連れのアメリカでの生活はどのようなものだった？」「娘さんのバイオリンの実力はどのくらいなの？」彼女は微笑みながら話をしてくれた。その厳しい苦しみの中でも愚痴を言わず、身を崩さない。聖書を読んだり、お祈りをする時は、両手をしっかり握って、端正な姿で、目の前におられる神様に向き合っているかのようにであった。帰り際にはいつも「ありがとうございます」と静かな笑顔で挨拶をした。

だんだん薬が強くなって顔色も悪くなり、座ることもできなくなっていた。そのもうろうとした意識の中でも、祈りが終わるとアーメン、ありがとうございますと唇を動かしている。

本当にきれいな人であった。

私たちが大阪を去ることを知り、上のお嬢さんが何度か礼拝に来た。笑顔がお母さんそっくり。私は泣きたくなくなる気持ちを抑えながらさようならを言った。心からの幸せを祈りながら…。

(鈴木善姫牧師)